発達理論の学び舎

Back Number: Vol 135

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

2681. 人生

2682. フローニンゲンに溢れる音楽体験

2683. 何気ない月曜日の朝より

2684. 空のモチーフと深耕する人生

2685. 豊富なオルガンコンサート

2686. 月曜日の午後に

2687. 迫るワールドカップの開幕

2688. 明日からの作曲実践について

2689. 宇宙空間に飛び出す夢

2690. 強烈な印象を持つ夢の振り返り

2691.『ゴッホ ～最期の手紙～』より

2692. その土地固有の土着神

2693. 書物との向き合い方及び土地勘の形成

2694. 成人発達理論を取り巻く現在の問題点

2695. 静かな朝に

2696. 直接体験からの出発

2697. 芸術と人間発達

2698.「芸術と人間発達」の続き

2699. 未知が既知に変わるとき

2700. 死の擬似的体験としての睡眠

© YOHEI KATO 2018

2681. 人生

先ほど終えた教会コンサートの余韻がまだ残っている。今回はオルガンコンサートではなく、アンサンブル形式だったが、四月にブダペストで参加した聖イシュトヴァーン大聖堂でのオルガンコンサートが自然と想起された。

コンサートが終了した後の何とも言えないあの余韻にまだ包まれている。マルクスは「宗教はアヘンである」と述べたが、音楽もまた然りなのではないかと思わされる。そうした側面は音楽の魅力であり、魔力でもある。教会を出た直後にそのようなことを思った。

コンサートが終わると、何とも言えない余韻に包まれながら私は教会の外に出た。コンサートに参加する前と後では見える景色が微妙に異なる。コンサートに参加することによって、私の知覚は間違いなく変容していたようだ。音楽がもたらす意識の変容作用。それに加えて、コンサートの最中に背筋を昇り抜けていく音楽的高揚感を私は幾度となく感じていた。

教会の扉を開けて外に出ると、どこか酩酊状態のような自分がいた。意識ははっきりとしており、思考も鋭敏なのだが、このリアリティがコンサートの参加前と異なって見える。リアリティをその外にある別のリアリティから覗いているような感覚と言ったらわかりやすいだろうか。そのような感覚で私はこのリアリティを眺めていた。

教会からすぐそばに街の中央市場がある。今日は日曜日であり、そこでは何かイベントが催されていたようだ。イベントの道具を片付ける人たちの姿を眺めている自分を天高くから眺めている自分がそこにいた。自分には意識があるのだが、その意識すらも外側から眺めているような感覚があった。意識の圏の外側からこの意識を把握しているという奇妙な状態で私は街を歩き続けていた。

今日のコンサートはアンサンブル形式であり、コンサートの最中に私は演奏者たちが一つのチームとして演奏を奏でているのだとふと思った。そして、チームが一丸となって一つの演奏を奏でることの素晴らしさを改めて感じていた。

よくわからないのだが、私の頭の中には、高齢者や病気を持った人たちと共に作曲を楽しんでいる自分の姿が想起された。いつか日本に帰り、季節ごとに別の県にある田舎の病院を訪れて、そこで

患者の人たちと作曲を通じて交流している自分がそこに見えた。なぜそのようなことを想起したのだろうか。創造活動に従事する楽しさと喜びを誰かと分かち合いたい。今の私はそのようなことを無意識的に思っているのかもしれない。

創造活動に伴うこの生の喜びと充実感を伝えるにはどうしたらいいのだろうか。創造活動によってもたらされる喜びと充実感、そして幸福感を独り占めするのはもうやめよう。そんな馬鹿なことはしてはならない。他の誰かに伝えたいことはそれなのだ。一体これを誰にどのように伝えたらいいのだろうか。

伝えたいと思う人の姿はまだ見えず、伝える手段も持ちえない今の自分。私は表現活動に今後も打ち込んでいくだろうが、表現活動の意義とその方法について他者に共有するための術を学んでいく必要があるかもしれない。

人生がまた新たな方向に動き出していく。動かない人生などない。

なぜ私は今日あの教会にいたのか。なぜあの教会であのような感覚や考えを持ったのか。意識の圏の外に出て自分を眺めた時に見出したものを自らの存在に定着させていかなければならない。ようやく自分の進むべき道が見えてきたような気がする。

絶え間ない創造活動に従事するということ。そして創造活動からもたらされる生の喜びと充実感・幸福感を他者と分かち合うこと。それだけだ。それだけができればこの人生に望むものは他にない。そしてそれ以外にやりたいことなどない。

創造活動、創造活動、創造活動。創造活動の共有、創造活動の共有、創造活動の共有。それらが自分の人生であり、自分の人生はそれらだ。フローニンゲン：2018/6/10（日）20:10

No.1062: After Rain

It rained a couple of days ago. After it stopped, everything in this world looked fresh to me. I suppose that this world continues to create something new at every moment. Groningen, 07:48, Thursday, 7/12/2018

2682. フローニンゲンに溢れる音楽体験

先ほど夕食を摂り終え、今は少しくつろいでいる。夕方に訪れた教会コンサートの余韻がまだ抜けていない。音楽の演奏を実際に聴くというのは本当に変容作用があるのだと思う。それは多分に治癒的であり、変容的である。

音楽の持つそれらの側面については深く探究していきたい。自ら曲を作ることを通じて、そして実際に演奏会に足を運ぶことによって探究を続けていく。その先に、いつか自分でも治癒的かつ変容的な作用を持つ曲が作れる日がやってくるかもしれない。何年かかってもいい。いやそうした日がこの人生においてやってこなくてもいい。何がどうであってもそこに向かって歩き続けていくだけだ。

今日参加した演奏会の休憩時間に、受付に置かれていたいくつかのパンフレットをもらって帰ってきた。自宅に戻ってゆっくりと眺めてみると、フローニンゲンという街はこれほどまでにクラシック音楽の文化が根付いていたのかと驚かされた。フローニンゲンに住み始めて二年が経とうとしている今頃になってそれに気づいた。いや、これは今気づいて本当に良かったと思う。

フローニンゲンでの生活はあと丸一年あるのだ。その期間にこの街の音楽文化をできるだけ吸収したい。それこそ、様々なコンサートホールや教会でほぼ毎週末何かしらのコンサートが行なわれている。ランチコンサートなどを含めると、平日にも様々な場所でコンサートが行われていることに気づく。

ここから私は自分の関心に絞りながらも積極的に演奏会に足を運びたいと思う。いくつかの除外条件としては、オーケストラの演奏、夜の演奏には参加しない。前者に関しては、楽器に対して一夫多妻制を採用することはしないという自分の偏った考えがある。交響曲をコンサートとして聴くことは控える。仮にピアノ協奏曲などがあれば少し考える。

基本はピアノの独奏かオルガンの独奏だけを聴きにいく。夜の演奏会に参加しないというのは、単純に自分の就寝時間が早いからだ。パンフレットを確認すると、夜の八時から開始されるコンサート

が随分と多くある。それらに参加してしまうと、いくら演奏会場まで歩いていけるからといって就寝時間が夜の11時を回ってしまう。それは必ず避けたい。

昨年の冬にマリア・ジョアン・ピレシュのコンサートに参加した。あの体験は素晴らしいものであったが、終わるのが夜遅く、ピレシュのコンサートを当面は最後にして夜の演奏会には参加しない。

本日教会でもらってきた幾つかのパンフレットの中でも、オルガン演奏に特化した100ページ近くの内容を持つしっかりしたパンフレットが非常に役に立つ。言語は残念ながらオランダ語のため、外形からしか意味を想像できないが、随所に挿入されている教会やオルガンの写真が美しい。フローニンゲン近郊の教会を全て網羅しており、今年一年間のオルガンコンサートに関する情報が全て記載されている。改めてフローニンゲンの箇所を眺めていると、随分と教会があることに気づかされ、写真を見ると、過去に目の前を歩いて通り過ぎたことがある場所もあった。

幸いにも、それらの場所は自宅から全て歩いて行ける距離であり、今年一年は積極的に教会のオルガンコンサートに出かけようと思う。値段も非常に手頃であり、無料のものも沢山ある。今後訪れる教会の名前を列挙しておきたい。日本語で列挙しようとすると発音がいまいちわからないため、オランダ語のまま書き留めておく。

1. Der Aa-kerk, 2. Lutherse kerk, 3. Martinikerk, 4. Nieuwe kerk, 5. Pelstergasthuiskerk, 6. Sint Jozefkathedraalの六つの教会はどこも徒歩の圏内だ。今週の金曜日には早速Martinikerkでパイプオルガンのコンサートがあるので是非足を運んでみたいと思う。

欧州での三年目の生活を迎えるにあたって、音楽体験を深めるきっかけがこの街に随所にあることを知れて本当に嬉しい。それらはきっとこの一年間の自分の支えとなり、今後の人生の何物にも代えがたい貴重な肥やしとなるだろう。フローニンゲン：2018/6/10（日）20:39

No.1063: Soleil Mystique

Although it was a little bit cloudy in the morning, I expected the weather to be sunny soon. Yet, it is still cloudy, but even so, it is no problem for me because I can feel the mystique of the sun. Groningen, 09:29, Friday, 7/13/2018

2683. 何気ない月曜日の朝より

今日の早朝はどこか不思議な美しさを持っている。書斎から見える空は少しばかり黒い雲で覆われているのだが、朝日が燦々と街に降り注いでいる。

ここからでは確認できないが、朝日の方角の空は晴れているのだろう。ここ数日間は五時前に起きるような日々が続いたが、今日は一時間遅く六時前に起床した。寝室から朝日が美しく輝いており、今日一日が輝いたものになるであろうことを象徴していた。時刻は六時半に迫ろうとしている。

今この瞬間には、種々の小鳥たちが固有の鳴き声を上げている。それに耳を傾けていると、昨日のバッハのアンサンブルコンサートを思い出した。様々な声部から構成される合唱も曲の一つにあった。人は皆固有の声を持っている。それを育み、しかるべき時にしかるべき方法でその固有の声を発することの大切さ。

人が固有の声を持つというのは、その声を外側に表明するためにあるのではないかと思う。なぜなら、この世界は多様性で成り立っており、一つ一つの声は多様性をもたらすために不可欠なものであるからだ。種々様々な小鳥たちの鳴き声がそのようなことを教えてくれる。

天気予報を確認すると、今日は一日を通して晴れるようだ。ただし、気温は高くない。最高気温は18度であり、日本で言えば春がようやく訪れた時のような、あるいは秋が深まりつつあるような体感温度である。明日はさらに気温が下がるようだ。涼しい夏の季節においても、自分の内側には静かに燃え続けているものがあることに気づく。それをもとにこの夏も、そしてこの秋も冬も力強く過ごしていく心持ちでいる。

今日は晴れるようであるから、午後からは大学の図書館に久しぶりに足を運びたいと思う。そこで勉強するわけでも、本を読むわけでもなく、協働プロジェクトに関する書類を印刷するためだ。図書館で印刷が済んだらその足で街の中心部に向かい、冬用のコートとマフラーをクリーニングに出す。さすがにもうコートとマフラーは必要ない。

ただし、気がつかないうちにそれらが必要となる季節がやってくることを知っているため、遅くともこの時期にそれらを一度クリーニングしておきたいと思った。それと先日、ズボンを洗い、アイロンをか

けている時、思わぬ高熱によってズボンの一部を溶かしてしまったので、その修理も頼めるかをクリーニング屋に確認する。クリーニング屋を後にすると、その足で街の中心部に買い物に出かける。少しばかり必要なものがあるため、それを買いに行く。

実は昨日、街の中心部にあるLutherse教会のコンサートに参加した後に買い物を済ませようと思ったのだが、夕方の五時にはもう多くの店が閉まっていた。そのため、今日買い物を済ませる。買い物に行くついでに途中でお金を下ろしておく必要がある。昨日コンサートに参加するために15ユーロを紙幣で支払ったため、財布には紙幣がなくなり、いよいよ数ユーロの硬貨だけとなった。

今年はほぼ毎月欧州各地を旅行するため、財布の中の所持金が数百円ではさすがに心もとない。今回は一年弱ぶりに100ユーロを下ろそうと思う。今の換算レートで言えば1万数千円ぐらいだろうか。それぐらいあれば、これからの旅行で現金しか使えない場合にも十分に対処することができるだろう。

これまでの経験上、今年にいくら旅を重ねようともこの100ユーロはすぐにはなくらないように思う。あえてなくなる可能性があるとすれば、今月から頻繁に足を運ぼうと思っている教会コンサートのチケット代金や寄付金によって減っていくことになると思う。そのようなことを早朝にふと考えていた。フローニンゲン:2018/6/11(月)06:43

2684. 空のモチーフと深耕する人生

早朝に日記を書き留めていると、空が晴れてきた。今はもう薄黒い雨雲のような雲は姿を消し、青空が広がりつつある。遠くの東の空に少しばかりまだ雲が残っているが、それも時期に晴れるだろう。

今、小鳥が書斎の窓際にやってきた。ひょっこりと顔を覗かせて、ガラスの向こう側からこちらを眺めている。そしてどこかに飛び去っていった。とても愛らしい小鳥の顔を見た。ここのところやたらと書斎の窓際に小鳥がやってくる。やはり近くに巣か何かがあるのだろう。小鳥たちはそこでこの夏を過ごすに違いない。それは冬への準備であるかのようだ。冬の旅に向けて今はゆっくりと休み、少しずつ支度をしているのだ。

私たちの人生にも適切な休息と支度があるのかをもう一度考えてみる必要があるように思う。休息と支度の双方が大事である。今はもう小鳥たちの姿は直接的には見えないが、引き続き美しいさえずりが聞こえている。初夏の早朝はひときわその美しさが際立つ。

空を眺めていると、改めて自分にとって空がどれほど大事かを知る。空は何か自分を惹きつけてやまないシンボルなのだ。刻一刻と姿を変える空。空の下に広がる世界の多様性。そして空の上に広がっているであろう世界の多様性。空の下に広がる世界は千変万化の様子が肉眼で捉えることができる。一方、空の上に広がる世界の千変万化の様子は心眼で捉えることができる。空は下にも上にも多様な変化に富んでいる。そうしたことが空に惹きつけられている要因なのかもしれない。

ゴッホはひまわりを愛し、ひまわりをモチーフに数多くの傑作を残した。自分にとっては空なのだ。空をモチーフにした曲をいつか作りたいと思う。仮に毎日一曲空をモチーフにした曲を作ったとしても、それは多様な姿になるだろう。なぜなら空を取り巻く世界は絶えず変化しているからである。また、空を眺めている自分自身も絶えず変化しているからだ。

そうしたことから、空をモチーフにして曲を作った場合、それは無限の多様性を見せるだろう。そうした無限の多様性を巧く表現する術を獲得していきたいと思う。空は万民のものであり、全ての生命のものである。空を眺め、空を題材にして曲を作ることの意味はその点にあるかもしれない。

今日は昨日と同様に、午前中に音楽理論の専門書を読み進め、昼食前に一度作曲実践を行う。音楽理論に関するテキストは午前中に三読目を終えることができそうだ。自分の状態を見極めながら、三読目の終了と同時に四読目を始め、自分の知識があやふやであった箇所をだけを確認していくように再度読み進めるのもいいかもしれない。あるいは、古代ギリシャ音楽に関する“Ancient Greek Music (1992)”の初読を始めるのも悪くないだろう。

書籍として読む本は今日はそれくらいにして、作曲実践に十分な時間を充てる。昨日のようなコンサートに出かけ、音楽体験を積むことと作曲に関する学習と実践を積み重ねていくことによって、ゆっくりではあるが着実に自分の中で深まっていくものがあることに気づく。

音楽理論や作曲理論に対する理解度の向上のみならず、はたまた作曲技術の向上のみならず、自己及び人生が深まっていくことを実感する。緩やかに、そして着実に進行することは、己と己の人

生を深耕させていく。それを絶えず念頭に置きながら今日一日を過ごしたい。フローニンゲン:2018/6/11(月)07:03

2685. 豊富なオルガンコンサート

起床してから一時間半が経とうとしているが、今朝方の夢について少しばかり思い出していた。今朝方の夢の中で私は、ある波止場で釣りをしていた。何も見えない真っ暗な海面が波止場から見える。海面に向かってルアーを投げ込み、魚が掛かるまで待つのではなく、魚が掛かりやすくするためにルアーに動きをつけた。

すると釣り竿に振動があり、魚が掛かったのだとわかった。ただしその振動はとても微妙なものであり、本当に魚が掛かったのか最初はよくわからなかった。リールを巻き、徐々にその振動と重さが魚によるものだとわかった頃にはすでに魚が波止場の足元に釣り上げられていた。すぐにその魚の種類を確認すると、どうやらカサゴのようなだった。

しかしよくよくその魚を眺めてみると、魚と人工物が混ざり合った生き物であった。外見上は確かに生き物としての魚なのだが、身体器官の幾つかは人工的に作られたものであることがわかったのである。その様子は若干不気味であり、私は釣り上げた魚を結局逃がすことにした。魚釣りをする夢の前後にも印象的な夢を見ていたが、今は記憶が薄れてしまっている。特に目が覚める前の夢そのものは非常に印象的だったのだが、その内容は忘却の彼方にある。

昨夜、昨日の夕方に参加したコンサートで入手した種々のパンフレットに目を通していた。特に、オルガンコンサートだけに特化したパンフレットを食い入るように眺めていた。教会の写真とオルガンの写真がとても印象的であり、それらを眺めているだけでどこか幸せな気分になった。今週の金曜日には早速マルティニ教会でオルガンコンサートがある。

ちょうど昼時であるから時間帯も望ましい。このパンフレットを持参してコンサートに出かけたいと思う。どの曜日のどの時間帯にコンサートに参加したのかがわかるように、参加したものに関してはパンフレットに印をつけておきたいと思う。

フローニンゲンで過ごす三年目はこのオルガンコンサートのパンフレットが最良の友になる。このパンフレットを携えて、様々な教会に足を運び、音楽体験を豊かにすることによって人生を緩やかに深めていきたいと思う。

今朝もまた改めてパンフレットを眺めてみると、自宅から歩いていける距離にある六つの教会は、特に夏の時期にオルガンコンサートをたくさん開催していることがわかった。パンフレットに掲載されている月ごとのコンサートを眺めてみると、その数の違いがはっきりしていた。

特に六月から八月にかけては本当に毎週のようにオルガンコンサートがある。自分が咀嚼できると思う分だけコンサートに足を運びたいと思う。週末にぶらりと教会に足を運び、そこでオルガンコンサートを聴くというのは悪くない。いやむしろそれは非常に贅沢だと言えるだろう。今手元にあるパンフレットには年末までのコンサートの日程が掲載されている。

九月以降は基本的にどの教会もコンサートの回数が減る。それでも毎月に少なくとも一回はコンサートが開催されるようだ。フローニンゲンで過ごす最後の一年間は、オルガンコンサートに積極的に足を運び、オルガンの音色を自己の存在の奥深くまで染み渡らせたい。今週の金曜日の昼にマルティニ教会で行われるオルガンコンサートがその始まりとなる。フローニンゲン：2018/6/11（月）07:49

2686. 月曜日の午後に

今日の早朝は本当に外が寒そうに見えた。暦の上ではもう夏だというのに。

早朝の様子が寒そうに思えたため、今日は午後から長袖を着て外出した。大学の図書館に立ち寄り、協働プロジェクトに関する書類を印刷した。大学キャンパスに向かう頃には随分と太陽が照っており、確かに風はひんやりとしていたのだが、キャンパスに着く頃には汗がにじみ出てきた。このくらいの気温であれば、やはり20分ぐらい歩くと体が熱くなってくるようだ。次回からはもう半袖で外出をしようと思う。

大学の図書館に立ち寄った後は、街の中心部に行き、クリーニング屋に立ち寄った。冬用のコートとマフラーをクリーニングに出した。今日は以前お願いをした時とは違う店員が担当しており、彼は二十代の前半だろうか。とても気さくなオランダ人であり、日本に関していろいろと質問をしてきた。

なにやら日本に是非とも一度訪れたいという考えを持っているらしく、彼の友人が日本を訪れた時の好意的な印象を語った内容の話を聞いた。クリーニング代金をカードで支払おうとすると、その店ではデビットカードも受け付けておらず現金のみの支払いであることを思い出した。手持ちの現金は日本円で数百円程度であったからその場で支払いをすることができなかった。彼に数分待ってもらうことを告げ、近くのATMで現金を下ろした。再び店に戻ると、彼が笑顔で出迎えてくれた。

そこでもまた少し立ち話をした。なにやら彼はこのクリーニング屋で働く傍ら、デザイナーとして自分のビジネスをしているようだ。彼がデザインした革製品を幾つか見せてもらうと、非常に質が良さそうだった。かなり突飛な質問だったが、彼から日本における革製品市場について質問を受けた。特に、クロコダイルやシマウマの革で作られた靴などについて質問された。

私はその分野にあまり精通していなかったため、あまり有益な回答をすることができなかったと思われるが、彼が手がけた製品やビジネスについて話を聞くのは面白かった。デザインはオランダで彼が行い、実際の製造はイタリアとイギリスで行っているそうだ。特に今は靴に力を入れているとのことである。また、ロシアではTシャツの製造も行っているという話を笑顔でしていた。

ちょうど彼のウェブサイトのURLを教えてもらったので、また後ほど調べてみようと思う。クリーニング屋を後にすると、最後に行きつけのチーズ屋に立ち寄り、いつもと同じナッツ類といつもとは異なるチーズを購入した。チーズに関しては、今日はちょっと別のチーズを試してみたいという気分だった。新しいチーズを試すときには、いつもチーズ屋の店主にそのチーズについて話を伺うようにしている。

購入するチーズについて知れば知るほどに愛着が沸き、美味しさも増すように思えるのは気のせいだろうか。おそらく気のせいではないだろう。来週の水曜日からロンドンへ出かけるため、次回チーズ屋に立ち寄るのは再来週になるだろうか。チーズ屋の店主に挨拶をし、私はチーズ屋を後にして自宅に向かった。

今日は自宅からゆっくりと大学キャンパスまで歩き、その足で街の中心部を散歩していると、なんやかんやで一時間半ぐらいの時間を歩いていたことになる。とてもいい運動だ。歩くことは私にとってなくてはならないものである。それは単に健康を維持するという以上の意味がある。

© YOHEI KATO 2018

今週の金曜日にはNieuwe教会でオルガンコンサートがある。夕方から始まるコンサートの前にクリーニング屋に立ち寄り、お願いしていたコートとマフラーを受け取る。金曜日も運動がてら散歩を楽しみたいと思う。今日の出来事を振り返っていると時刻は夕方の六時を迎えた。就寝までまだ十分な時間があるので、これからまた探究活動に励みたいと思う。フローニンゲン：2018/6/11（月）17:55

2687. 迫るワールドカップの開幕

午後に大学の図書館に足を運び、街の中心部に向かっている最中に、ふと一軒の古書店を見つけた。この二年間お世話になっているテオさんの店以外にも古書店が近くにあるとは知らなかった。オランダでは月曜日に閉まっている店が多く、この古書店も今日は閉まっていた。ちょうど今週の金曜日にこの古書店の近くの教会で行われるオルガンコンサートに参加する予定なので、その時にこの古書店を一度覗いてみようと思う。

「哲学関連の書籍や芸術関連の書籍を取り揃えている」という張り紙が店のガラス窓に貼られていた。どのような古書が置かれているのか今から少しばかり楽しみだ。

昨日Lutherse教会のアンサンブルコンサートに参加した際に、演奏者たちが長年に渡って積み重ねてきたものの尊さと価値について考えていた。彼らが今このような演奏ができるのは、本当に長大な時間をかけて鍛錬をしてきたからなのだ、ということに私はひどく感動していた。

この瞬間の演奏だけを見ていてはもしかするとそれらを見逃してしまいだろう。この瞬間になされている演奏は、彼らが様々なものを捧げながら演奏技術の修練に打ち込んだ賜物なのである。私はその瞬間に奏でられる音に感動するだけではなく、演奏者一人一人の独自の物語とこれまでの長大な歩みの全てを垣間見ているような感覚に陥っていた。とにかく私も自らの表現活動の技術を高める鍛錬を続けていきたい。

それは兎にも角にも自らが用いる日本語と英語の彫琢を行い、日記を通じた表現手法と作曲技術の向上を図っていく必要がある。日々の生活はそれらの修練のためにある。そうした修練の過程そのものが日々の充実感と幸福感に直結しているのだ。

昨日参加したコンサートの演奏者たちについて思いを馳せていると、いよいよ四年に一度のワールドカップの開幕が迫ってきていることに気づいた。ここでも同様のことが言える。一つ一つの試合で見せる選手一人一人の各プレーは、その選手の四年間の歩み、いやこれまでの人生の歩みが凝縮されている。日本代表の初戦と第三戦はフローニンゲンの自宅で観戦し、第二戦はロンドンのホテルで観戦する。

振り返ってみると、四年前のワールドカップの時はロサンゼルスで生活をしていた。あれから四年が過ぎたのだということを改めて思う。結果がどうであれ、少なくとも日本代表の三試合は全て観戦したいと思う。代表選手の一人一人が長大な時間をかけて積み上げてきたもの、捧げてきたもの。一つのプレーの背景にあるそれらを感じながら、選手のプレーを見届けたいと思う。フローニンゲン：2018/6/11（月）18:20

2688. 明日からの作曲実践について

時刻は夜の八時半を迎えた。昼前の太陽は影を潜め、いつものような沈みゆく西日を見ることができない。

夕食を食べている最中に一匹のハチが食卓の窓のそばにやってきた。窓ガラスの上を行ったり来たりしている様子を見ながら私は夕食を食べていた。夕食後、しばらくしてから再度食卓の窓ガラスを見ると、まだハチがそこにいた。今度は先ほどとは異なって、全く身動きせずに窓ガラスに張り付いていた。

窓のこちら側から窓ガラスを軽く叩いてみても何の反応もない。「寝ているのだろうか？」と私は思った。窓ガラスに張り付いているハチをよくよく眺めてみると、どこか愛らしい顔をしている。触角は驚くほど細く、手足もガラス細工のように繊細であった。しばらくハチを観察した後、私は書斎に戻った。

今日は午前中にバッハに範を求めて作曲を行った。時間としては二分程度の曲だと思うが、この曲に範を求めてみると、いつも以上に一曲を作るのに時間がかかった。というのも今日はいつもとは違った形で転調の技術を試していたからである。普段は八小節のまとまりごとに転調を活用することがよくある。今日は試しにそれよりも短い小節ごとに転調をさせてみることにした。

最初の16小節は一つの短調だけで作り、残りの16小節は四つの異なる短調に変化していくように転調させた。私の頭の中にはまだ各々の調がどこにシャープやフラットを持つのかの知識がしっかりと定着していないため、専門書をスキャフォールディングとして、それを参照しながら転調を適用させていった。

いつも作曲する際には、過去の作曲家の楽譜、専門書、そして作曲ノートの三つをスキャフォールディングとして活用している。作曲ノートに関しては、曲で試したいことや実験する際に必要な情報を予め書き出しておき、それを参照すれば曲が作りやすいような状態を生み出してくれる。それらを駆使しながら今日も曲を作った。予定では、モーツァルトに範を求めてもう一曲作りたかったが、今日はバッハの曲を参考にしながら転調の技術をあれこれ試すことができたのでよしとする。

ピカソが即興的にその場で一瞬にして絵を描くことができたのと同じように、転調を含めて、作曲の諸々の技術を自由自在に活用できるようになりたい。このリアリティの瞬間瞬間に生じる自分の感覚や感情を自由自在に曲として表現できるようになる日を求めて、明日も作曲実践に励む。

とりわけ転調の技術をより高めていくためには、日々の実践の中で転調を頻繁に活用していく必要があるだろう。その際には短い曲であってもできるだけ転調を活用するようにしたいと思う。明日に参考にするモーツァルトの曲では早速その考えを実行に移す。今日様々な調を活用してみて思ったが、自分の学習のためにはあえてC Majorの楽譜を最初に準備しておいて、そこからシャープやフラットを付す形で転調させていくことが望ましいように思う。

C Majorの楽譜を用いることもあるが、大抵はそれ以外の調から曲をスタートさせることが多いため、いつもその調を表す楽譜を用いている。その場合、楽譜の冒頭に付されている調号のおかげもあって、実際の楽譜上にシャープやフラットが乱立しないために見栄えがいいのだが、この調号に頼ってばかりいると、格調のどこにシャープやフラットがあるのかを一向に覚えようとしない自分がいることに気づく。

そうしたことからも明日からはあえてC Majorの楽譜を使い、そこから自分の手でシャープやフラットを置きながら転調の技術を適用していきたいと思う。これまでまた明日の作曲実践の楽しみが一つ

増えた。常に新たな課題意識を持ち、常に新たな仮説を持って作曲実践に励むこと。それが作曲技術を向上させてくれる鍵となる。フローニンゲン：2018/6/11（月）20:55

2689. 宇宙空間に飛び出す夢

今朝は六時過ぎに起床した。時刻は七時を迎えようとしている。

小鳥のさえずりが開けた窓から聞こえて来る。空一面が薄い雲に覆われていて、朝日は一切見えない。冷たい風がサラサラと流れている。

今朝方は強烈な印象をもたらす夢を見た。夢の中で体験した感覚が今もまだ自分の内側に残っている。冷や汗が出るような体験であり、同時に超越的な感覚をもたらす体験であった。目覚めてみると、こんなに低い気温であるにもかかわらず、私は大量の寝汗をかいていたことに気づいた。

目覚めと共にシャワールームに向かい、シャワーを浴びた。シャワーを浴びながらも今朝方の夢についてずっと考えていた。夢の中で私は、ある宇宙ステーションの建物の中にいた。この宇宙ステーションは地球にあり、米国のどこかの州にあった。

私はその建物の中のセミナールームのような場所にいた。なにやらこれから宇宙に関する講演がここでなされるらしい。会場は広々としており、随分と多くの人を収容することができる。会場に並べられていたのは平凡なパイプ椅子であったが、それが綺麗に並べられていた。私は一つの椅子に腰掛けた。

程なくして講演が始まると、講演者がいきなり私に質問をしてきた。私はその問いに戸惑うことなく、むしろその問いを楽しむかのように、自分が知っている範囲で、そしてこれまで自分が考えてきた範囲で回答をした。すると、講演者を含めて、会場全体の人たちが私の回答に驚いているようであり、感嘆の声が至る所で生まれた。私はその声に悪い気持ちは一切しなかった。むしろ、そうした称賛の声をもらえたことを嬉しく思った。

私が回答をしたところで、講演者が今度のアクティビティとして、その場にいる全員で一つのお題に回答するというゲームのようなものを提案した。そのお題をよく理解しないまま、私はそのゲームに

参加した。間違いなく宇宙に関するお題であるはずなのだが、ゲームに参加し始めてからもそのテーマが掴めなかった。ゲームが始まりだすと、徐々に全員が一つの輪になっていった。

私の右隣には、小中高を共に過ごした小柄な友人がいた。私はその友人と話しながらこのゲームに参加していた。気づいているみると、会場にいる全員が一つの輪を作り出しており、その様子は圧巻であった。全員が椅子に腰掛けながら移動をし、会場が巨大な輪を作り出す最後の最後になって、右隣の友人と私だけが輪の外側にいることに気づいた。

そこですぐさま輪の中に入っていくために、輪の切れ目を見つけようとした。椅子に腰掛けている人たちの背中を見ながら、どこか切れ目がないかを探していると、一つ切れ目を見つけた。その切れ目に入れてもらおうとして目の前に座っている男性に背中越しに声をかけた。するとその男性は、日本を代表するバンドのヴォーカルであった。まさかこのような場所で実際の人物に会えるとは思っていなかったため、私はひどく驚いた。

しかもこのバンドの曲は昔から聴いているものであり、今でも時折聴いている。そうしたことからも、この歌手に会えたことはとても嬉しいことであった。私はその歌手に挨拶をすると、彼はとても気さくに挨拶を返してくれた。とても腰の低い対応をしてくれたことは私をさらに感動させた。

会場全体を見ると、先ほどまでは全員が輪になって椅子に腰掛けていたのだが、今は全員が椅子の後ろに立っている。その歌手の方が私に冗談めかした提案をしてくれた。

その歌手:「僕は椅子の後ろに立つから、君はこの椅子に腰掛けるといいよ」

私:「いいんですか？でも自分がこの椅子に腰掛けるのは恐縮なのですが・・・」

そのように私が述べると、その歌手は笑顔を見せながら手招きをして私を椅子に座らせた。このバンドとその歌手の方の人気を考えると、自分がその方の椅子に腰掛けるというのはとても気が引けることであった。さらには会場全体の人が椅子の後ろに立っているのであるから、なおさらそれは目立つ行為であった。しかし、私はこんな機会は滅多にないであろうという思いから、思い切って椅子に腰掛けた。

すると案の定、会場中の視線が私に向かってきた。私はそれに狼狽することなく、むしろ注目を浴びていることが心地よく感じた。すると突然その歌手の方が後ろから、「それでは今から出発します」と述べた。その瞬間に、椅子が巨大なブランコのような乗り物になった。

しかも、先ほどまでは天井があったセミナールームの天井がなくなっており、そこには紺碧の青空があった。その青色はとても濃く深い。全ての存在を飲み込んでしまうぐらいの濃い青色がかった空がそこに広がっていた。私が座った椅子がブランコになり、その歌手の方はブランコの下に張り付く形でブランコを動かし始めた。最初はゆっくりとしていたが、徐々にその速度は増し、高度はぐんぐんと上昇していった。

あるところから、私は幾分恐怖を覚え始めた。ブランコの動く速度と高さがもう耐えられないほどのものになり始めたのだ。しかし、それでもその歌手はブランコを動かすことをやめはしなかった。私は幾分自暴自棄になり、いや全てをその体験に委ねるかのように、急激な速度で動くブランコに身を委ねた。ブランコが往復運動を進めるにつれて速度と高さが増していき、ブランコの高さが頂点に達する都度、紺碧の空が手に届く距離になっていった。

私はそれがどこか嬉しく、恍惚とした表情を浮かべながらブランコの往復運動に自己を委ねていた。あるところから、私の身体の感覚が徐々に無くなりつつあることに気づいた。だが、ブランコを握った手だけは感覚を確かなものにしておかないと、ブランコから滑り落ちてしまうと思った。そうした意識だけが私の頭の中にあったが、徐々にその意識すらも無くなっていった。

ブランコを下から動かすその歌手はあるところを境目に静かに歌を口ずさみ始めた。その歌は私もよく知っているものであり、これまで何度も聞いてきたものだった。その歌が始まる頃、もう私には身体感覚が無くなっており、意識もほとんどないような状態であった。ブランコの速度が無常力状態を作り出すまで加速し、もはやその高度は大気圏を突き抜けていくほどになった時、私の意識は完全に飛んだ。

耳元で懐かしい歌だけが聞こえて来る。だが、私の意識はもうない。身体感覚もない。歌だけがそこにこだましており、宇宙空間だけが目の前にあった。私の意識は完全に飛び、同時に身体は宇宙空間に投げ出されていた。

その状態がどれほど続いただろうか。ゆっくりとだが、ブランコが地球に帰っていく。ブランコは静かにその速度と高度を落とし始めた。ブランコの下にいたその歌手の方はまだ静かに歌を歌っている。

ブランコが地球に戻ってしばらくすると、その歌手の方はブランコを下から抱きかかえたまま眠りについたようだ。それに呼応するかのように、意識が飛んでいた私は夢見の意識に入った。揺られるブランコの上と下に二人の男性が夢見の意識状態で眠っている。ブランコの動きがようやく完全に止まった時、二人は目を覚ました。

目を覚ましてみると、それは酩酊状態のような感覚であった。この地球に戻ってきたという感覚がまだ信じられず、私の意識は朦朧としたままであった。足取りもおぼつかなかったため、私は先ほどまで隣にいた旧友に助けられながら近くのテーブル席に腰掛け、静かに水を飲み始めた。私の目の前を、一緒にブランコに乗っていた歌手の方が静かに通り過ぎていった。

彼は私を一瞥し、小さく微笑んでから無言でその場を去っていった。私も小さく微笑み、身体感覚がまだ取り戻せていないながらも小さく会釈をした。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2018/6/12(火)07:33

2690. 強烈な印象を持つ夢の振り返り

雲で覆われた空の下を数羽の鳥たちが優雅に飛んでいる。私はその姿を眺めながら、再度今朝方の夢について振り返っていた。起床してすぐに夢の内容について書き留めたが、果たしてどれだけ正確に書くことができたのか定かではない。とにかく一つ言えるのは、あのような強烈な体験を夢の中でしたことはこれまでほとんどないということだ。

直近の十年で覚えている範囲で言えば、今から七年前にサンフランシスコで暮らしていた時に見た夢と、今から二年前に見た夢の二つが、今朝方の夢に匹敵するほどの印象を持つものだった。前者に関しては、今朝の夢と同様に、自分が宇宙空間に飛び出して行くというものだった。最初は目を奪われるような惑星の輝きに感動をしていたが、ある時を境として視界が突如として真っ暗になった。

そうした状況の中で、宇宙空間の遠くの方に光る物体を見つけた。それは一羽の青白く輝くハトであり、ハトが全身を輝かせながら宇宙空間をゆっくりと舞っていたのである。しかもそれは一直線に進む動きであった。視線をふとそのハトから再度宇宙空間に戻すと、全く同種の輝きを持つ三羽のハトが別々の方角からある一点に向かってゆっくりと飛行していることに気づいた。

合計で四羽の鳩は、東西南北の方角からある一点に収束していくかのように飛行をしていたのである。私はその一部始終を全て見届けていた。宇宙空間の中で目に入るのは、青白く輝く四羽のハトだけであった。ハトが一点に集まった瞬間に、宇宙空間全体が真っ黄色な激しい光に包まれ、それはビックバンのようであった。宇宙の創始を行った四羽のハトと、宇宙の生誕の瞬間を目撃する夢だった。

フローニンゲンで二年前に見た夢というのは、過去の日記でも書き留めている。伝説が残る地方の村に行き、そこで海底に沈む何体ものお地蔵様を発見するという夢だ。全てのお地蔵様が一気に光り輝き、私に微笑みかけてくるという夢だった。特にここ数年は確かにその他にも印象に残っている夢を見てきたが、あえて二つを挙げるとするならば上記の夢が強烈に印象に残っている。

今朝方の夢はそれに匹敵するほどの印象を持つ夢であり、夢から目覚めた後の感覚は一番強いものであったと言えるかもしれない。今朝方の夢について改めて振り返ってみると、私はある時を境に完全に失神をしていた。「失神」と書いて初めて気づいたが、この言葉は「神を失う」ということを表面的には表しているようだ。

しかし私はむしろ、夢の中で神と出会ったような感じがしていた。ここで述べている神というのは、言うまでもなく人格神ではない。自己を遥かに超えたような存在及び全ての存在または事象が生起する全体の場のようなものを指している。正直なところ、夢の世界の中で失神するということはこれまで一度もなかったので、今でもあの体験には驚いている。

失神状態から戻ってきた時にも、夢の中の私の意識は朦朧としていた。また、夢から覚めた後の私の意識もどこか朦朧としており、ここに幾つもの意識の状態階層を見ることができる。私は間違いなく、覚醒意識、夢見の意識、元因意識（コーザル意識）を順を追って体験していたのだと思う。仮に

失神することなく、そこでも自己の意識を保つことができていたら非二元の意識状態に参入していただろう。

先ほど書き留めた夢の内容をさらに細かく眺めてみると、意識が飛んだ後に、夢の世界の中でさらに夢を見ていたことからも、夢見の意識だけを取ってみてもそこには階層構造があるようだ。夢の世界の中のさらに一段深い夢の世界。その世界に足を踏み入れていたのが睡眠中の自己であった。

上述のように、この夢の現象面についてはそれなりに説明が可能だが、この夢が自分にもたらす意味はどういったものなのだろうか。巨大なブランコが紺碧の空に吸い込まれ、大気圏を超えて宇宙空間に飛び出した時、私は絵も言わぬほどの幸福感に包まれていた。そして恍惚感の最中に失神した。宇宙空間で何を見ていたのかは全く覚えていない。

ただ、自分が宇宙空間そのものと一体となった感覚だけが今でも残っている。この夢は一体どのような変容作用と治癒作用があったのだろうか。具体的にはわからないが、何か途轍もない変容の力と治癒の力があったように思える。自分の中の何かが完全なまでに癒され、自分の内側で全く新しい何かが始まったような気がしている。

それを言葉で語ることはできず、むしろそれを語る必要などないのかもしれない。途轍もない治癒と変容が自分の内側で起きたという感覚だけがあれば十分だ。この夢についてはまだ不可解なことが幾つも存在しているため、今後もまたこの夢について振り返ることがあるだろう。今日はいつもの朝とは全く違う朝のように思えてくる。何かが本当に新しく始まったのだと知る。フローニンゲン：2018/6/12（火）08:17

2691.『ゴッホ ～最期の手紙～』より

今朝方の夢から覚めて二時間弱が経とうとしている。夢の中で体験した感覚がまだ自分の内側に残っている。宇宙空間に自己が投げ出され、宇宙と一体となることに伴う強烈な感覚。それは消えることなく私の内側に残り続けている。

一日の活動を始めるために、そろそろ今朝方の夢から離れていく必要があるだろう。しかし今そのように書いてみた瞬間に、今朝方の夢に後ろ髪を引かれるような感覚がするのである。まだ気づけ

ていないことがあるのだろうか。まだ書き留めていないことがあるのだろか。あの夢にはきっとまだ今の自分には気付かぬものが眠っているらしい。それがはっきりとわかる。

夢の中で失神する直前に見た紺碧の青空の雄大さと宇宙空間の荘厳さ。そして失神から回復した後に見た紺碧の空は今も忘れることはできない。

今日は雲が空全体を覆っており、昨日よりも気温が低い。今日は特に外出の予定はなく、昼食前に一度スーパーに行くことと、夕方に近所の郵便局に郵便物を出しに行くぐらいだ。その他の時間は探究活動と創造活動に充てる。欧州での三年目の生活は本当に充実したものになると今からすでに確信している。

学術機関に所属しないことを選択したのは本当に正解だったように思える。やはり私は組織に所属していてはダメなのだ。組織に所属すると、自分の中の大切なものが骨抜きにされてしまうように思えてくる。これまで業界も分野も異なる様々な組織に所属していた。しかし、ことごとくどれもダメだった。少なくとも今年一年は再び一人となり、自らの関心に赴くままに探究を進め、創造活動に日々邁進していきたいと思う。

昨夜、ゴッホの生涯を描いたドキュメンタリーの二度目の視聴を終えた。これはとても良い作品であった。結局英語で一度視聴し、今回は珍しく日本語でも一度視聴した。今後もこのドキュメンタリーを繰り返し見ることになるだろう。それに合わせて昨夜は、ゴッホの油絵と素描をもとに作ったアニメーション映画を見た。

このブルーレイディスクは先日訪れたヴァン・ゴッホ美術館で購入した。実はこの映画は、昨年の年末に日本に一時帰国した際に上野の映画館で見たものだ。タイトルは『ゴッホ ～最期の手紙～』だ。この作品を見たときの感想及び体験についても当時の日記に書き留めていたように思う。

昨日から改めてこの作品を見始めた。ちょうど半分まで見たところで続きは本日見ることにした。この作品についても連続してまずは二度繰り返し鑑賞することにしたい。ゴッホは生涯において描いた絵が売れることはほとんどなかったが、晩年には確かに少しずつ世間からの評価を得ていた。しかし、世間から評価をされればされるほど、世間から逆に遠ざかっていった。

ゴッホのこのあり方に私は大変共感を覚える。世間からの評価や交わりはゴッホにとって重要なものではなく、創造することが何よりも大切だったのだろう。どこか私も全く同じ思いを持っている。とにかく創造に次ぐ創造の日々を送ること。

今の私は日記にせよ、作曲にせよ、技術も乏しく、量も不足している。だがいつかきっとそれらが実を結ぶ日が来るだろう。その時に、私はゴッホと同じようなあり方で日々を送り続けるに違いない。創造活動だけに従事する日々だ。それ以外のものは本当に必要ない。

自分の創造活動が実を結ぶというのは、世間から評価を得ることでは決してない。自分にとってそれは、自然言語と音楽言語を用いて、自由自在に自分の内的感覚を形にすることだ。世間からの評価は全く必要でないとさえ言える。自らの創造活動で生活をしていくわけでは決してないのだ。

自分にとって創造活動は生活の糧を得るための手段ではない。肉体的に生きるための手段なのではなく、精神的に生きるためにあるものなのだ。毎日を充実感と幸福感で満たすためにそれがある。今日も日記の執筆と作曲実践の双方を推し進めていく。

毎日わずかであってもいい。少しずつそれらの技術が進歩していくことを心の底から望む。フローニンゲン:2018/6/12(火)08:48

No.1064: Palms toward the Blue Sky

After I completed my third master's thesis, I was thinking about the distinction between scientific language and poetic one, particularly the scope and nature that both can reveal. Groningen, 09:44, Friday, 7/13/2018

2692. その土地固有の土着神

──土地の名前はたぶん　光でできている──大岡信

時刻は昼の一時を迎えた。先ほど昼食を摂り終え、これから午後の仕事に取り掛かる。今日は朝からずっと雲が空を覆っている。昼食前に近所のスーパーに買い物に出かけたが、とても肌寒かった。

午前中にふと、その土地固有の名称について思うことがあった。この世界を旅するとき、いつも私はその土地の名前に着目する。いかなる場所の土地の名前も個性的であることがすぐにわかる。土地の名称はどれも個性豊かで興味深いのだが、そこには個性を超えた何かがあるような気がいつもしている。

それが何なのかがようやく見え始めた。その土地の名前は土着神の名前に他ならないのではないか。その土地固有の名称は、その土地に宿る土着神の名前なのだ。そんなことを午前中にずっと思っていた。

来週の水曜日から始まるロンドン旅行が迫ってきている。早いもので出発の日まで一週間ほどとなった。ロンドンにも固有の土着神が宿っているに違いない。しかも、小さな土着神は一つ一つのストリートに存在している。それらの土着神に会いに行くのが来週からのロンドン旅行の一つの意義だ。

来月に足を運ぶデ・ホーヘ・フェルウェ国立公園には、文字通り大自然を司る神がそこにいるに違いない。ここで述べている神とは、今朝方の日記でも書き留めていたように、人格神を指すのではなく、私たちの存在を遥かに超えたような存在及び全ての存在または事象を生み出す全体場のようなものを指している。八月に足を運ぶフィンランドにおいても同様に、土着神がそこに存在しているだろう。

世界中を旅行するにしたがって、徐々にその土地固有の土着神を感じ取れるようになってきている。旅が自分の感覚を解放させつつあるようだ。閉じられた感覚が今徐々に開きつつあるのを実感している。

今日は昼食前に作曲実践を行った。改めて、作曲技術を涵養していくことを焦ってはならないと思った。無理をせず、少しずつの実践を積み重ねていく。毎日わずか一つか二つだけの曲しか作れなくてもそれでいいのだ。とにかく少しずつ進んでいくことが大切となる。

昨夜ふと、技術と思想の双方を涵養していくことが創造活動上においてどれほど大事かを考えていた。技術偏重であってはならず、また思想偏重であってはならない。いくら技術があっても思想がなければ意味はなく、いくら思想があっても技術がなければ意味がない。それら双方が高度に獲得されて初めて自分なりの創造活動に従事することができるのだと思う。

© YOHEI KATO 2018

まだまだ学ばなければならないことが沢山ある。今日はこれからもう一曲ほど作り、作曲理論に関する専門書を読み進めていく。時間があれば美学に関する書籍にも目を通すことになるだろう。実践と理論的学習を絶えず往復するように日々を進めていく。

薄暗く肌寒い外の世界にもやがて陽が差すであろう。フローニンゲン：2018/6/12（火）13:25

No.1065: Singing Grasshoppers

Grasshoppers can not only hop but also sing. When we observe them with our eyes of spirit, we can see their singing. If we don't recognize it, we are typical modern people who lost eyes of spirit. Groningen, 07:45, Saturday, 7/14/2018

2693. 書物との向き合い方及び土地勘の形成

時刻は夕方の六時を迎えた。午後から夕方にかけて風が強さを増し、外は一向に曇り空のままであった。今日からしばらく気温の低い日が続くようだ。冷たい夏が続き、そしていつの間にやら秋の足音が聞こえて来る。そんな状況にこれからなっていくのかもしれない。

今日は昼前に、作曲家のドキュメンタリー作品のDVDかブルーレイディスクを探していた。すると、"In Search Of Great Composers"という作品を見つけた。これは、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、ショパンの生涯を辿るドキュメンタリー作品である。バッハがここで取り上げられていないのは残念だが、この五枚組のDVDをイギリスのアマゾンより購入することにした。

先月末にアムステルダムのヴァン・ゴッホ美術館でゴッホのドキュメンタリーDVDを購入して以降、書籍だけではなく、視覚的に芸術家の生涯を辿ることも実に有意義だと気付いた。今回購入したドキュメンタリー作品は、合計で10時間ほどの長さであり、得るものは非常に多いだろうと思われる。

このドキュメンタリー作品についても繰り返し視聴し、得られるものは骨の髄まで得ようと思う。画家にせよ、作曲家にせよ、己の魂と共に真に生きた人間からはいつも大きな励ましを得る。本日購入したDVDは、創造活動に従事する一人の人間にとって大きな肥やしと支えになるだろう。

今日は昼食前に一曲作り、午後にも一曲を作った。その後、美学に関する書籍を三冊読み終えた。これらの三冊は初読であったため、細部に入ることなく、全体を把握するような読みを心がけた。今の私は美学の領域固有の言語体系に習熟していないため、専門書を細かく読んでいくことは得策ではない。

理解できる箇所が少ないがゆえに、わずかばかり理解できる箇所、しかもそれが自分の関心に合致する箇所を中心にして、理解の範囲を広げるような読み方をすることが賢明だ。初読を終えた三冊についてはしばらく寝かせ、また読み返したいと思う。随所随所に考えさせられる記述があり、次回読み返す際には印を入れたそれらの点について考えを深めていくことにする。今日読んだ三冊は、どれも先月に街の中心部の古書店で購入したものである。

それらの書籍を読み終えた後にふと思ったのは、「自分は将来に読むための本を今購入しているのかもしれない」ということであった。確かに古書店で私は、今の自分の関心に合致するがゆえにそれらの書籍を購入した。しかしそれらの書籍が真に必要になるのは、もっと後のことになるということをわかったのである。これは今回のように美学の書籍についてだけに当てはまることではなく、振り返ってみると、これまで購入してきた全ての書籍がそうであったように思う。

とりわけ発達理論に関する書籍のほとんどは、最初は全く理解できないものばかりであり、後々になってそれらの書籍の真価に気づき、少しずつ書籍の内容が理解できるようになってきたように思う。書籍の理解には時差があり、書籍の存在価値は現在から未来に向かって伸びている。そのような気がしてならない。

これからはしばらくは美学に関する書籍、そして音楽理論や作曲理論の書籍を繰り返し読んでいくことになるだろう。自分が関心を持ち、理解がなんとか及ぶ箇所を中心に書籍を読み進めていき、徐々に土地勘を形成していく。

何度も書籍を読み返すことは、何度もその土地を訪れることを意味し、それによって徐々にその土地に関する理解が深まっていく。この夏からは特にそうした意識を強く持って書物と接したい。フローニンゲン：2018/6/12（火）18:06

No.1066: Its Bright Song

It sings and indicates itself. That is “its” tenet and verity. Groningen, 07:57, Saturday, 7/14/2018

2694. 成人発達理論を取り巻く現在の問題点

夕食前にもう一つだけ日記を書き留めておきたい。先日、成人発達理論に精通している知人の方から非常に重要なテーマについて質問を受けた。端的には、「自己の生きる時代や社会そのものを真に批判的に眺めて、それについて批判活動を展開していくことができるようになるためには、どの発達段階に到達している必要があるのか?」という問いである。

最近では成人発達理論の認知が世間で広まりつつあるが、結局、成人発達理論の知見が既存の社会構造の中で──とりわけ企業社会の中で──成功を成し遂げるための単なる道具に成り下がってしまっているという状況には問題があるだろう。

知人の方が指摘してくださったように、成人発達理論の意義と価値は、このリアリティに存在する種々の呪縛から自己を解放し、積極的に世界に関わっていくことを可能にすることにある。それにもかかわらず、現在のような形で成人発達理論が認知・活用され始めているのは私も残念である。

その知人の方の質問にある発達段階というのは、特にカート・フィッシャーの理論モデルを適用した場合の段階を指しており、どの段階にあればこのリアリティに潜む虚構性を見抜き、それに対して健全な批判活動を展開していけるようになるのか、ということが争点だ。

リアリティの虚構性を真に客体化させためには確かにフィッシャーのダイナミックスキル理論で言うところのレベル12の認知能力が必要だと思うが、そうした能力があるだけでは虚構性を見抜いた上での批判活動は展開できないであろう、という回答をした。つまり、レベル12の認知能力は、社会の物語が持つ虚構性を対象化した上でそれに対して健全な批判を投げかけるための必要条件であり、十分条件ではないということだ。

まず必要条件について言及すると、確かにそれほど高度な認知能力を携えていなくても既存の物語に対して疑問を持つことは可能である。だがここで重要な点は、既存の物語の何に対してどの次元で疑問を投げかけることができるのかという点にある。

極端な例を挙げると、学校社会を一つの物語世界に喩えると、それはレベル10しか持ち合わせていない中学生でも学校制度や学校文化に対して疑問を投げかけることはできる。こうした例からも、どのようなレベルの認知能力を持っていても既存の物語に対して疑問を投げかけることはできるのだが、物語の複雑な構造特性にまで踏み込んで疑問を呈するというのはやはりレベル12あたりの能力が必要だと思う、という回答をした。

次に十分条件に関しては、「領域（domain）」固有の体験と観点をいかに豊富に獲得しているかが、複雑な物語構造の限界を深く捉えるために不可欠だという点をまず指摘した。ちょうど先月末にアムステルダムで開催された国際ジャン・ピアジェ学会に参加した際に、そこでフィッシャーの協働者であったThomas BidellやMichael Mascoloの発表を聞く機会があり、フィッシャーのダイナミックスキル理論は領域固有性を強調している理論なのだと再認識した。

対象とする物語の範囲が拡大すればするだけ、領域も広がるため（例：経済社会、教育社会、政治社会）、物語構造を対象化させるための認知能力とその能力を発現させるための体験と観点が必要となる。上記の学校の例と同様に、高度な認知能力があったとしても、その領域に固有の体験や知識がなければ、結局浅薄な議論しか構築できないのではそのためである。

私たちを取り巻く種々の物語は、このリアリティに無数に張り巡らされているようなものであり、真にそれらの構造を対象化させるためには複数領域の物語の中でそれを対象化させるような鍛錬をする必要があるように思える。

ここまでのところを要約すると、冒頭の質問に対しては、「物語そのものを対象化するだけであればどの段階からでも可能であるが、複雑な物語の構造を把握し、客観的に批判の目を向けることができるためにはレベル12の能力が必要であり、批判の目を向けるのみならず、批判を自分の言葉や表現活動を通じて形にしていくことができるためには、レベル12の能力および当該物語領域に対する十分な体験と観点（知識）が必要だ」というのが私の考えである。

© YOHEI KATO 2018

知人の方から頂いたメールへの返信の中に、最後に追加して述べたのは、社会の物語が持つ虚構性を対象化した上でそれに対して健全な批判を投げかけるためには、実は段階特性以外にも重要なことがあるという点だ。それは端的には、「社会の物語構造から強制的に外に出される体験」である。文字通り、「社会の物語構造の外に出て初めてその物語が内在的に秘めている虚構性がわかる」という現象が起こる。

例えば、失業によって強制的に企業社会からはじき出された瞬間に、企業社会を冷静な目で眺めることができるようになった、というような体験は十分に起こり得ることだろう。また、日本（日本語空間）の外に出て初めて日本の言説空間の構造的課題が見えるようになった、ということも十分に起こり得る。

回答の前半で言及した点はどちらかというと線形的な発達特性であり、上記の例は意識の状態とも関係する非線形的な発達特性によるものだと考えている。「それほど高度な認知能力無しにも、社会の物語構造への問題意識は生まれえるのではないか?」という点は、上述のような強制的に社会の物語構造の外の世界にはじき出された（あるいは外の世界を突然に垣間見るような）体験が引き起こす非線形的な発達特性と関係しているように思う。

自己の囚われ及びこの世界への囚われから私たちを解放してくれる力を本質に持つ成人発達理論が食い物にされている現在の状況にあって、このテーマは非常に大切なものだと考えている。

既存の物語から脱却し、批判的な眼を持ってその物語に対して批判活動なり表現活動なりに従事できるためには上述の要件を満たす必要があるが、人々は一体いつまで既存の物語に盲目的であり続けるのだろうか。人々は一体いつまで既存の物語の中で幻覚を見続けるつもりなのだろうか。
フローニンゲン：2018/6/12（火）19:35

No.1067: A Path of Wind

Today’s weather is very calm and fresh. A path of wind looks like delighted. Groningen, 08:35, Sunday, 7/15/2018

2695. 静かな朝に

今日は五時半過ぎに起床し、六時前に一日の活動を開始させた。昨日に引き続き、今朝も空一面が雲に覆われている。天気予報では一日中曇りのようだが、昨夜の就寝前には少し雨が降ったように、今日も小雨が降るかもしれない。気温は相変わらず低く、外はとても肌寒そうである。今日は午後に、近くの郵便局に行こうと思っており、半袖では寒いであろうから長袖を着て外出したい。

昨日の今朝方はとても印象深い夢を見ていた。今日もまた何かしらの夢を見ていた。場面の印象がすでに断片的な記憶と化してしまっており、詳細を思い出すことができない。先日メールでやり取りをしていた知人の方が夢に現れ、その方の旅のアレンジか何かをしていたような夢だった。

覚えているのはそれぐらいだろうか。やはり昨日に強烈な夢を見たことによって、自分の無意識が一旦落ち着こうとしているのかもしれない。今夜はどのような夢を見るだろうか。

早朝のこの時間帯はいつもとても静かだ。それは季節を問わない。春夏秋冬、この時間帯の朝は常に落ち着きを持っており、静寂な空間がそこに広がっている。ただし春夏秋に限って言えば、早朝には小鳥の鳴き声が一段と鮮明に聞こえて来る。

冬の時代の朝に小鳥の鳴き声が聞こえてきていたのかどうか不確かである。冬の時期において、私が小鳥たちの鳴き声に無自覚であったのか、それとも本当に小鳥たちは鳴き声を上げていなかったのかのどちらかだろう。今年の冬はそのあたりにも注目をしてみようと思う。

今日は午前中に、今年度の新たな協働プロジェクトに関するオンラインミーティングがある。昨年一年間お世話になった協働者の方と今年も一緒に仕事をすることができて嬉しく思う。昨年は非常に納得のいくサービスを開発することができた。今年も昨年と同様に、意義のあるサービスを世に送り出すことができたらと思う。

秋からはまた異なる協働者の方と新たなプロジェクトを開始させる。こちらの協働者の方とは一昨年からプロジェクトの準備をし、昨年一年間にそのプロジェクトが実を結んだ。今年の秋からはそのプロジェクトを継続させ、より意義のあるものにしていく。今年は特にこの二つの協働プロジェクトに力を入れたいと思う。

これ以上仕事を入れるとゆとりを失ってしまいそうであるため、今年はできるだけそれらの二つの仕事に集中する。あとは自分の純粋な関心に基づいて美学や意識の形而上学に関する探究を進め、日記の執筆と作曲を継続させていく。早朝の落ち着いた雰囲気のように、今年一年間も落ち着きとゆとりを持って過ごしていきたいと思う。

今日はこれから過去の日記を編集し、作曲理論に関する専門書を読み進めていきたい。オンラインミーティングまでにまだ時間があるので、日記の編集も読書も十分に進めていくことができだろう。フローニンゲン：2018/6/13（水）06:15

No.1068: Delicate Mettle

Mettle has various types, and a delicate one exists among those types. Groningen, 08:55, Sunday, 7/15/2018

2696. 直接体験からの出発

時刻は夕方の四時を迎えた。たった今、近所の郵便局に行き、郵便物を投函してきた。

昨日に引き続き、今日も肌寒い一日である。初夏の足音は聞こえているのだが、その足取りは不安定だ。そうした時にこそ、気持ちのゆとりを忘れないようにしたい。

午前中に協働者の方とのオンラインミーティングを行い、今年度に着手する新たな開発プロジェクトについて話し合った。日本の企業社会への関与に関しては今年度も非常に充実したものになるだろう。一方で、それとはまるっきり領域を変えたところで自分の探究活動と創造活動を着実に進めていく。一つは美学の探究である。

先月に街の中心部の古書店で購入した“Aesthetics: An Introduction to the Philosophy of Art (1987)”の初読を今日中に完了させたい。美学や芸術論に関する探究は本当に緩やかでいい。知識の獲得が先ではなく、作曲実践を通じた体験が先に来るべきであり、実際に芸術作品を鑑賞するという体験が先に来る必要がある。

知識から出発するのではなく、自らの直接体験から出発することを最優先させたい。体験を豊かにし、体験を積む過程の中で美及び美的経験について考えていく。その際に、美学や芸術論を参照しながら自らの思索を深めていく。そうしたプロセスを辿っていくように心がけていきたい。来月に訪れるクレラー・ミュラー美術館での体験は、また自らの探究を豊かにしてくれる肥やしとなるだろう。

上記の書籍を読み進めるのに並行して、作曲理論に関する基礎的なテキスト“Music Composition 1 (2014)”を読み進めていく。今朝方に読解を進め、今はその書籍の半分まで再読が済んでいる。夕食までには残りの半分を読み終えることができそうだ。本書は二巻のシリーズになっており、明日は第二巻を読み進めていくことにしたい。

ここでも美学の探究と同様に、作曲という実践をとにかく最優先させる。体験を積みながら自分の中で仮説を立て、新たな問題意識を持っていく。そうした積み重ねがあって初めて、作曲理論の解説書が活きてくる。

夕食後、二冊の書籍を読み終えることができていれば、本日二度目の作曲実践を行いたい。おそらく時間的に夜の作曲実践は短い曲に範を求めることになるだろう。その際に参考にしたいのは、バルトークの『ミクロコスモス』の続きの作品だ。

昨夜もこの楽曲集の中の一曲を参考にして曲を作った。バルトークのこの楽曲集は演奏者に対する教育的配慮のみならず、作曲を志す者にとって教育的配慮を感じることのできる曲が多い。いや、全曲が教育的な配慮によって生み出されていると言っても過言ではない。この楽曲集に収められている曲数は153に及ぶ。今ちょうど3分の1の曲を参考にした。残り百曲ほどに範を求めたあとは、ゲオルク・フィリップ・テレマンの楽曲を参考にしたい。

ちょうど先日にテレマンの楽譜が届いたため、中身を確認してみると、実に学びの多い学習教材のように思われた。バルトークの作品を全て参考にして曲を作るまでにもうしばらく時間がかかるだろう。テレマンの曲に範を求める頃にはまた少し作曲技術に進展があればと思う。フローニンゲン：2018/6/13（水）16:28

No.1069: A Sequel to a Dream

I feel as if I'm having a sequel to a dream. The spectrum of consciousness corresponds to that of reality. Groningen, 09:13, Monday, 7/16/2018

2697. 芸術と人間発達

今日は夕方まで曇り空であったが、夕食を摂り終えたこの時間帯には夕暮れの太陽が顔を覗かせている。空は夕日で黄金色に輝き、夕日の光が優しく地上に降り注いでいる。今日もいつの間にか終わりに近づいている。そしてまた明日がいつの間にか始まるのだろう。

夕食前に、"Aesthetics: An Introduction to the Philosophy of Art (1987)"の初読を終えた。本書を読むことによって幾つかまた自分の考えが前に進んだように思う。特に、本書の内容とは直接に関係しない事柄について考えるきっかけを得たことは幸運であった。その一つには、健全な発達を育んでいくための芸術教育の意義についてである。厳密には、健全な発達を継続的に実現させていくための生涯にわたる芸術教育の大切さについてである。

我が国に限って見た時、義務教育課程における芸術教育の質が高いとはお世辞にも言えず、多くの人にとって芸術教育は基本的に高校を卒業した時点で終わる。私もそのような経験をした一人だ。学校教育において、技術と思想のない芸術教育を強制的に長い期間に渡って受けさせられ、芸術の価値を理解することができなくなってしまい、芸術を愛でるような心を育む機会を得られたなかったのが自分であったように思う。成人になってからも、芸術教育など望むことはできなかった。

また、そうした関心も自分は持ち合わせていなかった。自分自身の体験を振り返ってみた時に、そこにはやはり真の芸術教育というものが欠落しており、一生涯にわたって芸術教育を受けれるような機会が喪失していたように思う。

最近強く実感しているのは、継続的な発達とそれに伴う人生の質の深化は芸術を通じて深くなさうるということである。このあたりについては自分の考えをもっと深めていかなければならないが、どのような実践よりも芸術を通じた自己及び社会への内省が人生の質を深めていくことに密接に関わっている気がしてならない。

これまでの私は、芸術が持つ意義に完全なまでに盲目であったように思う。確かに、仮にここで芸術の持つ力を強調しすぎることは直ちに芸術に対する新たな盲点を生み出す。そのため、芸術の意義と力については体験を通じてより慎重に吟味をしていきたいと思う。

結局のところ、私たちが発達を遂げていくためには、現在の自己を通じた表現活動と、表現物及び自己への内省が不可欠なのではないかと思う。また、それらに加え、表現活動を通じて社会と自分の人生そのものを内省していくことが大切だ。

興味深いことに、日々作曲実践を積み重ねていくと、昨日の自己から一歩外に出ていく感じが毎日している。創造行為には、こうした自己超出作用が備わっているようなのだ。

昨日ふと思ったのは、創造行為は差異をもとにして新たな差異を生み出すことに他ならないということだ。言い換えると、創造行為は差異を絶え間なく生み出す自己によって行われる活動であり、その活動の結果生み出された表現物は差異を必然的に含んでおり、その差異を自己が実感する時、新たな差異をまた生み出していくという意味である。

創造行為は差異の創出であり、差異の確認であり、そこから新たな差異を生み出していくという円環運動だとも言える。表現手段とその対象は何であってもいいだろう。とにかく自己を通じて創造活動に従事することは、絶え間ない差異化を自己にもたらし、それが自己を緩やかに深めていく。そして自己が緩やかに深まっていくことは、人生の質がゆっくりと深まっていくことを導く。

芸術と人間発達については本当に多くの観点からより深く考えていなければならないと思う。人生においてこうした大切なテーマに出会えたことを純粋に喜びたいと思う。明日も明後日もこのテーマについて考えていく。フローニンゲン：2018/6/13（水）19:58

No.1070: Swaying Summer Grass

The grass in front of me is being blown by a refreshing breeze. My heart is resonating with it. Vibration and synchronization seem to be omnipresent in this reality. Groningen, 09:29, Monday, 7/16/2018

2698.「芸術と人間発達」の続き

印象派の絵画のような朝日を見た。今日は五時半過ぎに起床し、目覚めてすぐに寝室の窓から見えたのは印象派の絵画を彷彿とさせるような明々と輝く朝の太陽だった。幾筋にも伸びた朝日の光を拝みながら私は寝室を後にした。今日は六時過ぎから一日の活動を開始させた。

今日もまた新たな一日が始まるのだという実感。静かな決意にも似た気持ちを持ちながら今日もまた新たな一日が始まろうとしている。

昨日までとは異なり、早朝の空は晴れている。少しばかり薄い雲が所々に浮かんでいるが、晴れの空であることに変わりはない。昨日の天気は一目瞭然に曇りと判断できたのに対し、今日の空は一目瞭然に晴れだと判断できる。それぐらいに今朝は晴れている。

初夏の早朝の心地よい風が街路樹の葉をなびかせている。今日から一週間は肌寒い日が続く。よくよく考えてみると、五月の半ばや六月に入ってから気温が上がる日があったが、フローニンゲンの夏はこのように肌寒いのが特徴だ。半袖を着て外出して全く問題ない日というのは、七月か八月の夏においてもそれほど多くない。

天気予報を確認すると、今日は午後から小雨が降るようだ。正直なところ早朝のこのような天気からはそれが想像できない。

昨夜は少しばかり芸術教育について書き留めていたように思う。今日もこの主題に関する書籍を読んでいこうと思う。今日読む予定の書籍は、とりわけ音楽教育と精神性に焦点を当てたものだ。この書籍を読みながら、音楽教育と人間発達について考察をし、その考察を芸術と人間発達というテーマにまで敷衍していく。

自分が明確にしなければならないのは、芸術教育の意義、そして現在の芸術教育の問題点である。どちらの点について考える際にも、自らの直接体験と知識が必要になるのは言うまでもない。芸術教育の意義については、特に人間発達の点から考えていきたい。まずはそこを出発点にするのが最善だろう。

自分自身の関心がそこにあるということと、これまで自分が積み重ねてきた探究が人間発達にあるということを考えてみると、そこを出発点にするのが賢明だ。芸術作品の鑑賞体験、芸術活動そのもの、そして芸術教育が私たちの発達にどのような影響を及ぼしうるのか。また逆に、私たちの発達がそれらにどのような影響を及ぼしうるのか。

芸術は私たちの発達に何をもたらしてくれるのか。それとは逆に、私たちの発達は芸術に何をもたらしてくれるのか、という双方向の因果について考えていきたい。芸術と人間発達のテーマに関する探究は始まったばかりであるため、とにかく自分が関心のあるトピックを絶えず書き留めておくのがいいだろう。トピックを列挙し、今この瞬間に考えられる範囲のことを書き留めておく。それが僅かな分量であっても一向に構わない。

書きながら考えるということ。その精神が大切であり、書かなければ考えは一向に深まっていかない。書くことによってトピックが派生し、トピックそのものの深化を促す。書くことに並行して、芸術と人間発達について考えるための観点を獲得していく試みも忘れてはならない。これについては、芸術と人間発達に関する専門書や論文を読むことを通じて行っていく。

考えるための観点は、自らの体験や文献からもたらされる。体験から出発した観点は自らの思考と文献をくぐらせる。一方、文献から出発した観点は自らの思考と体験をくぐらせていく。直接体験と書物から得られる知識、そして自分自身の思考という三つを相互に結びつけていく。結び目のどれか一つに偏ってはならない。とにかくそれらの相互関係が重要であり、それらが相互作用をするように意識をする。今日の探究もそうした意識の中で行われていく。フローニンゲン：2018/6/14（木）06:36

2699. 未知が既知に変わるとき

昨夜芸術と人間発達について考え、今朝方そのテーマについて簡単に自分の考えを付け加えておいた。このように同じテーマを何度も訪れ、そのたびごとに自分の思考空間に浮かんだことを文章として書き残しておく。考えが全く進まなくてもいい。たった一行しか書くことがなくてもいい。その一行が後々どれだけ大きな差となって現れてくることか。

書くことによって自分の考えを広く深く展開させていく。考えを書くことは、その瞬間に一つの形として考えが凝固されることを意味するが、凝固されたものがまるで生き物であるかのように自己創出を始めていく。

まさに昨日に芸術と人間発達について書き留めた後、私は就寝をしただけだが、今朝方起きてみると、考えが自己展開をしていたのだ。そこでまた少しばかり文章を書き留めておくということを行った。書くことが尽きないという状況。それを見るに、私の中で探究項目や自己そのもの、そして人生そのものが深まっていく大きな余地を確認することができる。それを確認できてとても嬉しく思う。

人生はこれから始まる。思索も探究も実践も、何もかもがこれから始まろうとしている。その始まりに向けたスタート地点に向かいつつあることを嬉しく思う。人生は全くもってこれからであり、ようやく自分の人生が始まろうとしている。この感覚は欧州で生活する日々が積み重なっていくごとにその強さを増していく。

欧州での三年目の生活の後に待っている自分とその人生が今は全く想像できない。自己も人生も未知であること。それはすなわち深まりの余地だと言えないだろうか。深まる余地が大きければ大きいほど、この先に待っている自己や人生が見えなくて当然なのではないだろうか。海を思い出してみればいい。浅瀬の底はすぐに見えるが、深海の底はすぐには見えない。

両者は深さが違うのだ。深ければ深いほど、その先に待つものは見えなくて当然なのである。この原則は自己及び人生にも当てはまるのではないかと思う。

今、全く見えない自己と人生に向かって歩みを続けている。自己と人生は本当に興味深い。実は自己と人生は常に見えているのだ。常に見えているのだが、その深さは目には見えないのだ。では、今見えている自己と人生は一体なんなのだろうか。それは浅瀬を見ている自分と浅瀬そのものなのだろうか。

仮に今見えている自己と人生を、見ているものと見られているものの区別を超えて、大海とみなしたらどうだろうか。あるいは、大海、その上にかかる空、近くにある山などを含めた全体と捉えたらどうだろうか。自己と人生に関する未知性はこのように拡大していく。それでいて確かなものが今この瞬

間の自分の内側に芽生えていることにも気づく。それを大切にしなければならない。それを携えて今日も一日を過ごしていく。

未知が既知に変わる瞬間。それは至ってシンプルだ。未知に向かって歩き続け、未知を通り過ぎていくこと。そこで未知だったものを振り返れば既知になっている。未知が既知に変わるというのはこんなにシンプルなことなのだ。欧州での三年目の生活の後に待っている自己と人生が今この瞬間に未知であるならば、そこに向かって歩けばいい。歩き続け、ふと振り返ってみたときに、それは既知なものとして姿を現しているだろう。

欧州での三年目の生活は、この二年間を凌駕するほどに読み、書き、作る。学術機関に所属するという制約から解放され、自分の望む探究と実践に望むだけ時間を充てることができる。今年一年間は歩けるところまで歩いてみようと思う。フローニンゲン：2018/6/14（木）06:58

2700. 死の擬似的体験としての睡眠

時刻は朝の七時を迎えた。早朝からいくつか日記を書き留めたが、まだ自分の中で収まらない何かがある。文章を書き留めたいという衝動、いや、内側にある何かが外側に形として誕生したいという願いのようなものが存在していることに気づく。

起床してから一時間半ほど経ったところで、ふと今朝方の夢について思い出した。覚えていることはごくわずかしかないのだが、夢の中で私は、今年の初旬に通っていたインターン先のオフィスの中にいた。自分のオフィスの左隣には、何か特別な部屋があって、その部屋の中でも私は何かをしていたのを覚えている。その部屋がどのようなものであったのか、そしてそこで何をしていたのかは覚えていない。

覚えているのは、その部屋のドアを閉め、自分のオフィスのドアの鍵を開け、その中に入ったことである。そして自分のオフィスに入った瞬間に、机の上に置かれていた古く大きなラジオから幾世代か前のオランダの流行歌が流れ始めたことである。

「ヴィンセントはラジオを消し忘れたな」と私は思った。このオフィスはヴィンセントという別のインターンと私で共有していたものだった。ヴィンセントが普段使っていた机の上にあるラジオが突然鳴り始

めたのであるからそのように思っても仕方あるまい。私はラジオから流れてくる歌に少しばかり耳を傾けたが、しばらくしてラジオを消した。

そして部屋の窓を開けた。心地よく、それでいて力強い風が部屋に流れ込んできたところで夢の場面が変わった。

今朝方はそのような夢を見ていたことを先ほどふと思い出した。この夢を見る前、つまり昨夜の就寝前、そして先ほど早朝にコーヒーを入れていた時に考えていたことが合致した。

昨夜、そして先ほどはなぜだが、100歳に向かうまで今のような量の日記を毎日書き続けていき、100歳を過ぎてから過去の日記をゆっくりと最初から読み返したいという思いが襲ってきた。今のような量を100歳になるまで書き続けていくと、その頃にはどれだけの分量になっているのか定かではない。分量がどれだけ巨大なものになったとしても、自分はそれを最初からゆっくりと読み返し、当時を振り返りながら今の自分の考えや気持ちなどを書き足していくことを行いたいと思った。

そしてその頃には、もはや他者が執筆した書物などそれほど必要としないのではないかということも思っていた。確かに、100歳を過ぎても他者が執筆した書物から得られることはあるだろう。だが、書物から何かを得ることと、自らの人生を自らの手で執筆していくことは異なるものである、という考えが自分の中で芽生えていた。結局私は、自分の物語を自分で執筆したいのだろう。

他者の物語を聞くこと。その意義と価値については認めている。だが、他者の物語を聞くことが最優先にされてしまう自分の人生とはいかほどのものだろうか、と考えていたのである。

自らの人生を綴り続けること。それが何よりも自分が大切にしていることなのだと改めて気付かされる。100歳を迎える頃に自分の肉体が存続しているのかは定かではない。それは先ほどの日記で書き留めていたように、完全に未知なことだ。

ここ最近、自分の人生の終わりに対して静かな気持ちになる。つまり、死という現象について静寂に包まれた気持ちを持ち、死に対して沈黙する自分がいる。

© YOHEI KATO 2018

とりわけここ最近は毎日のように思っていることがある。それは日々就寝に向かう際に、眠りの世界に落ちるということはある意味臨死体験であり、一日を終え、眠りにつくということは死の擬似的体験をしているに違いないということだ。この考えはいつも私を静かにさせる。あるいは、安らかにさせると言ってもいいかもしれない。

私たちにとって寝るということは、新たな一日に向かう行為であるのと同時に、死の擬似的体験と死への準備をすることに他ならないのではないかと思う。この考えに賛同するかのように、書斎の窓際に一羽の小鳥がやってきた。近くで小鳥たちが美しい鳴き声を上げている。フローニンゲン：2018/6/14（木）07:26

© YOHEI KATO 2018